

## 拒絶から超克へ

- カルドーゾとエヴァレットに見るマルサス人口法則のアメリカでの理論的消化過程 -

山崎 好裕 (福岡大学)

### はじめに - アメリカにおけるマルサス人口論の扱い

マルサス人口論のアメリカ合衆国での受容を巡っては、1989年に J. R. Gibson の *Americans versus Malthus: the Population Debate in the Early Republic 1790-1840* が出版され、その包括的な研究が深められた。また、イギリスでの普及過程に関しても、J. P. Huzel の *The Popularization of Malthus in Early Nineteenth Century England: Martineau, Cobbett and the Pauper Press* が 2006 年に出版されて、社会的普及や受容の様子が詳細に示された。こうした研究が学会や大衆への普及過程を対象にしている一方で、学問的消化過程におけるマルサス人口論の理論的解釈や論理展開という視点からの研究はまだ十分ではないように思われる。本報告では、アメリカという限定された地域についてはあるが、イギリス以外の諸国での古典派経済学者が、ユニークなかたちでマルサス人口法則に対応した事例を、理論的に示すことを目的にしている。

アメリカでのマルサス人口論への反論としては、まずヘンリー・ケアリーのそれが取り上げられるのが通例であろう。ケアリーは、労働が希少で土地が豊富なアメリカでは、イギリスで形成された古典派経済学の諸命題の多くが当てはまらなないと考えた。とりわけ、こうしたアメリカ古典派経済学者の基本姿勢は、マルサスの人口法則、リカードの地代論への批判となって現れる。こうしてアメリカの古典派経済学者たちは、ヨーロッパでの古典派経済学の諸理論を拒絶するだけでなく、それを超克して普遍的な理論を構築することを志向するようになった。マルサス人口論への対応にも、そうした対応の変化と努力が表現されている。

サウス・キャロライナのジェイコブ・ニュートン・カルドーゾは、絶えざる生産性の上昇が商品価格を低下させるという近代技術のあり方を以って、リカードの成長理論が予測する分配上の諸帰結を批判した、論理構築力に優れたアメリカ古典派経済学者である。カルドーゾの理論的著作である *Notes on Political Economy* は 1926 年に出版されている。彼は、マルサス人口論に関して、それが社会制度的諸要因を無視している点に批判を集中した。カルドーゾは、マルサスが人口の指数的増加を導くとした要因の他に、社会のなかに人口の過度の増加を予防的にチェックする諸制約が存在することを重視する。そして、マルサスの間違いは、社会や経済制度の機能不全が引き起こしていると考えられる貧困の問題を、人口の自然法則に基づくものとしている点にあると述べた。これは後のマルサス批判者によっても繰り返されることになる論点であり、マルサス人口論を相対化する典型的な論理の一つであった。

生涯を南部で過ごしたカルドーゾに対して、ボストンのアレキサンダー・ヒル・エヴァ

レットは、マルサス自身へのインタビューを踏まえて、1923年に *New Ideas on Population* を出版した。このなかでエヴァレットは、人口増加が貧困や不足ではなく、むしろ豊富や繁栄をもたらすとして、マルサス人口論の論理の逆転を行った。結論のみを読むならば、有効需要説的な内容が予想されるのだが、実際にエヴァレットが行ったのは、専門的生産への特化や生産性の改善というサプライサイドでの好影響の強調であった。この点、マルサス自身もそうであった、古典派経済学のサプライサイド経済学的な特徴と、そのパラダイムのなかでの理論的反応という性格がよく現れている。また、エヴァレットの記述のなかには、より積極的に、現代の内生的成長理論に現れる人口集中の外部経済効果をイメージさせる部分もあって興味深いのである。

## 1. カルドーゾの議論 - 経済成長と人口

カルドーゾ<sup>1</sup>はアメリカ南部を出ることなく諸活動を行った古典派経済学者であるが、その理論的分析能力は極めて高く、リカードの理論の換骨奪胎を行った体系を構築するほどであった。<sup>2</sup>

カルドーゾは南部の利害を代表する自由貿易論者として、関税に関してはそれを否定する立場にあったが、リカードの理論体系事態については批判的な見解を持っていた。カルドーゾ自身の体系は土地の収穫逓減を否定し、持続的な生産性向上を前提にするものであったが、その主張は豊かな土地の継続的開墾というアメリカの歴史的事実を念頭に置いた皮相的なものではなく、リカードに匹敵する完成度を持つ数理モデル的構造のなかに収穫逓増を取り込んだものと理解することができる。

カルドーゾはマルサス人口論の評価にあたっては、経済の制度的前提ということを重視した。カルドーゾによれば、マルサスは社会の制度的枠組みを無視しているため、人口成長への促進要因と同様に強い制約要因が内蔵されていることを見ていない。したがって、マルサスが人口法則と呼んだものは法則ではなく、社会構成の不完全さがもたらしたものに過ぎないとしたのである。

カルドーゾはまず、その著書『経済学ノート』の冒頭「地代」の章で、人口の増加は農業における改善に依存しており、劣等地はこの改善にちょうど見合った限りでしか耕作されるようにしなければならないとする。そして、自らの見解は、カルドーゾが「新理論」と呼ぶ

---

<sup>1</sup> ジェイコブは、ニューヨークを経てアメリカ南部に移住したロンドン商人デイヴィッド・カルドーゾの子として、1786年にジョージア州サヴァンナに生まれた。8歳になったときに一家でサウス・キャロライナ州チャールストンに移ったが、ジェイコブ・カルドーゾはそこで晩年まで新聞編集者、経済学者、演劇評論家などとして活躍した。最晩年は再びサヴァンナに戻り、1873年に他界した。息子のフランシス・カルドーゾは、南北戦争後のサウス・キャロライナ再建政府で指導的役割を果たした政治家であった。

<sup>2</sup> 山崎[2001]は、リカードの小麦生産モデルの枠組みでカルドーゾの数理モデルを構築し、その条件の下では経済成長とともに国民所得の分配における地代のシェアが徐々に減少していくことを示した。

リカード＝マルサスの学説のちょうど逆で、人口増大を生産性の低下ではなく、その上昇と結びつけるものであるとした。<sup>3</sup>このことは、カルドーゾが、人口が何か自然法則的に増大するというのではなく、むしろ社会的に適切な制約が働くはずと考えていることを意味する。

このカルドーゾは著書を人口法則に関するマルサス批判で終わっている。<sup>4</sup>

もし、マルサス氏が、労働価格が社会的ニーズの適切な指標、あるいはその需給の表現になっているとして、人口増大への刺激と同様に有効で様に、正しい予防的制限が働くという人口原則について述べていたならば、これに異を唱える者はいないであろう。確かに彼は、それが自然水準にある場合には労働価格は社会の必要の表現であると述べているが、この言い方は明らかに、たとえば、救貧対策といった労働の需給をかき乱す特定の制度に言及する際に使われているのである。したがって、それは社会法則全体やそれに付加される諸習慣との関係で、社会システムの全体構造に関して言われたものではない。私の考えるところ、マルサス氏の間違いは、私たちが誤った社会構成の帰結かもしれないと考えるものを、「自然法則」というふうにして述べてしまったところにあるのである。

カルドーゾによれば、正しい予防的制限が人口増大への刺激と同じように働く社会状態を考えれば、人口と食糧の増加率はお互いにそれぞれから離れることはない。

したがって、完璧さの夢に浸ることなく、次のように考えても、達成不可能な理想の実現を期待する危険を冒すことにはならないだろう。独占に至る様々な原因とともに長子相続の制度がいたるところで廃止され、個人財産への保証が完璧になり、公衆の負担が緩和されれば、食糧生産の増加率は大幅に上昇するだろう。また、もっとたくさんの時間を使って労働者階級を指導することができ、彼らが人口問題について、さらには、生活の快適さと体面を保つのに必要な熟慮と見通しの信条について、有効な教育をきちんと受けられるならば、マルサス氏が「道徳的制約」と名づけた制限を、現在以上に働かせることが可能になるであろう。このような社会的要素の改善の結果について正確に述べることはできないし、上記の仮定の下で人口と食糧の増加の相対的な比率がどうなるかを言うこともできない。だが、少なくとも現在と過去の条件の下で人類が直面してきた状況とはまったく異なったものとなることだけは確信できるだろう。<sup>5</sup>

ここに現れているのは、カルドーゾが得意とする批判対象のロジックに則って相手を論

---

<sup>3</sup> Cardozo[1826], p.35.

<sup>4</sup> Ibid. pp.123-4.

<sup>5</sup> Ibid. pp.124-5.

駁するという議論の進め方である。カルドーゾは、労働市場のメカニズムを通じたチェックがきちんと働いている限り、人口が食糧の増産を上回って大幅に増えることは考えにくいと言っている。そして、人類史のなかで人口と食糧のアンバランスを原因とする貧困などの悲惨が起きてきたのは、社会制度の不完全さがあったためであると考えているわけである。

## 2. エヴァレットの議論 - 生産性上昇と人口

カルドーゾは完成した市場経済体制の下では人口増加への刺激と同様に予防的制約が働くことを強調したのであった。これに対して、エヴァレット<sup>6</sup>が述べたのは、人口増加が貧困などの社会的問題を引き起こすどころか、むしろ労働生産性の上昇にプラスの効果をもたらし、経済成長に貢献するということであつた。カルドーゾにおいては、生産性の向上は製造業者による工夫や科学の発展によって外生的に与えられるものであり、彼はそれを人口増加のマイナスを解消するものと位置づけていた。そして、エヴァレットに見られるのは、そのように、生産性の向上が経済に内生的であるということだけでなく、マルサス以降貧困と結び付けられてきた人口増大こそ、その原因となる良きものであるという論理の逆転であつた。

エヴァレットはその著書『人口に関する新理論』のなかで、人口問題の現れ方がその経済が置かれた状況によって変化することを指摘する。そして、その原因は「個人の労働とその生産物の量が共に環境によって変化する」<sup>7</sup>ということに置かれている。まず、第一に、「個人の労働が量的に固定されているということは全くない。それは自然が与えた性質、および個人の行動の仕方を決める動機によって様々に変わる。」<sup>8</sup>また、労働の質についても、「労働の生産性を決める環境は必然的に 2 つということになるが、それは労働の行われる自然条件と労働する際の技能である」と、エヴァレットは述べている。

このように問題を相対化した上で、エヴァレットが問うのは人口の増加が生活物資の不足をもたらすのか、それともその豊富をもたらすのかという論点である。エヴァレットの答は、人口増加はマルサス自身の結論とは逆で、生活物資の豊富をもたらすというものであつた。「一定の領土の中で人口が増加すると即座に分業が始まるというのはよく知られた話である。分業はあらゆる産業領域で新しい機械の発明や生産方法の改善、技術や科学の急激な進歩をもたらす。このような労働生産性の向上の結果としての〔生産物の〕増加は、

---

<sup>6</sup> アレクサンダーは 1792 年にボストンに生まれ、ハーヴァード大学卒業後法律を修めて法律家としての活動を始めた。その後、オランダ公使の秘書や自らスペイン公使を務め、帰国後はノース・アメリカン・レビュー誌の編集者になるとともに、マサチューセッツ州議会議員として政治活動を続けた。外交官としての活動もキューバ、続いて中国と続き、弁務官として滞在していた広東で 1847 年に病死した。兄のエドワードもウィッグ党の連邦議会議員を務めた政治家である。

<sup>7</sup> Everett[1923], p.23.

<sup>8</sup> Ibid., p.24.

その比率において、もともとの原因であった人口の増加よりも明らかに大きなものになる。」

このようにエヴァレットは、人口の増加に伴って起こる人々の生産能力の上昇は、むしろ加速度的に起こるため、マルサスが等比級数的であるとした人口増加を上回って進む可能性すらあると考えたのであった。<sup>9</sup>

しかし、ここでエヴァレットは、人口増加が需要増加を介して経済に生産性の上昇を迫るという間接的な因果連鎖を考えているのでは全くない。エヴァレットの説明では、人口の増加がある地域での人口の稠密をもたらし、それが直接に生産性の上昇につながっているのである。<sup>10</sup>「人口の増加が需要に比しての物資の供給増大効果をもたらすのは、既に利用されている領土の上で人口の増大が始まる時だけである。そうでない場合でも、労働供給は増大するだろうが労働の際の技能は以前のままに留まる。だが、後者では、技能もまた労働者数と同様に増加する。労働生産性はほぼ全面的に労働を行使する際に用いられる技能と科学とに依存するのだから、たとえ同じだけの人口増加があっても、前者より後者の方が、生産物は絶対的に豊富になるのである。」<sup>11</sup>こうしてエヴァレットは、生産性の持続的上昇の内生的要因を見出したのであり、それを人口増加と直接に接続することで、アメリカ古典派経済学サイドからのマルサス人口法則批判の論理的環を閉じようとしたのであった。

<sup>9</sup> この議論から連想されるのはLucas[1988]の内生的経済成長モデルである。Lucas[1988]では、Uzawa[1965]の人的資本を経済成長に導入したモデルをほぼそのまま引き継ぎながらも、重要な1点において改変を加えている。それが人的資本の外部効果である。

Lucas[1988]は国民所得の均衡式を次のように書く。

$$N_t c_t + \dot{K}_t = AK_t^\alpha (u_t h_t N_t)^{1-\alpha} \beta \hat{h}_t$$

左辺はN人の国民の消費と資本の増加分で表される投資とに国民所得が分けられることを意味する。右辺は技術水準を一定としたコブ=ダグラス型の生産関数だが、括弧のなかには人的資本のうち、uだけの割合が財の生産に使われ、残りは人的資本の蓄積にまわされることを踏まえている。最後に掛け合わされているのが人的資本の外部効果であり、国民の平均的な人的資本が増加するとそのγ乗という加速度的な生産増進効果が経済全体に及ぶということである。国民の平均的な人的資本は、hレベルの人的資本を持つ国民の数をN\_hとすると、下記の式で表される。

$$\hat{h} = \frac{\int_0^{\infty} h N_h dh}{\int_0^{\infty} N_h dh}$$

<sup>10</sup> 人口の稠密が労働生産性の増加につながることは、Lucas[1988]でも前掲の人的資本の外部効果との関連で強調している。Lucas[1988]はJacob[1969]を引きながら、「このような考察で私たちは、外部的人的資本が存在することと、それが知識の成長の重要な要素となっていることを納得できるかもしれない。…彼女は、都市が経済的な意味で原子核のようなものだという観察から、経済成長でそれがいかに重要な役割を果たすかを強調している。…経済生活で都市が担う中心的な役割の説明で定式化する必要のある〔都市の持つ〕『ちから』は、私が集計的な経済発展の特徴を説明する一つの力として〔この論文で〕定式化した『外部的人的資本』と正確に同一の性質を持つようなものであると思われるのである。」(pp.38-9)

<sup>11</sup> Everett[1823], pp.3-40.

## おわりに

本稿で確認したように、アメリカにおけるマルサス人口論への理論的反応においては、単なる拒絶に留まらない理論的超克と新展開の動きが見られていたのであり、その過程を通じてアメリカ古典派経済学の特徴もまた形成されていったと考えることができるのである。<sup>12</sup>

## 参考文献

- Cardozo, J. N., *Notes on political Economy*, 1826, reprinted by Augustus A. Kelley, 1960.
- Everett, A. H., *New Ideas on Population*, 1823, reprinted by Augustus A. Kelley, 1970.
- Gibson, Jr., J. R., *American versus Malthus: the Population Debate in the Early Republic 1790-1840*, 1989, Garland.
- Huzel, J. P., *The Popularization of Malthus in Early Nineteenth-Century England: Martineau, Cobbett and Pauper Press*, 2006, Ashgate.
- Jacob, J., *The Economy of Cities*, 1969, Random House.
- Lucas, Jr., L. E., 'On the Mechanics of Economic Development', *Journal of Monetary Economics* 22, 1988, pp.3-42.
- Scott, A. J., *Geography and Economy: Three Lectures*, 2006, Clarendon Press.
- Spiegel, H. W., *The Growth of Economic Thought*, 3<sup>rd</sup> edition, 1991, Duke University Press.
- Uzawa, H., 'Optimal Technical Change in an Aggregate Model of Economic Growth', *International Economic Review* 6, 1965, pp.18-31.
- 根岸隆 『経済学の歴史』1983年、東洋経済新報社。
- 山崎好裕 「ジェイコブ N . カルドーゾの収穫逓増モデル」2001年、『進化経済学論集』第5集、進化経済学会。

---

<sup>12</sup> 人口増加から有効需要の増大を介して労働生産性の上昇が起きるという論理を、エヴァレットらが採らなかったのは、イギリスの古典派経済学自体がサプライサイドの論理に徹していたためであろう。これはアメリカの古典派経済学者の超克の対象であったマルサス自身でも同様であった。根岸[1983]は、マルサスと有効需要説について次のように述べている。「マルサスは、貯蓄が投資を超えることの結果として利子率が下落することを認めていた。また、利潤が減少すれば貯蓄する意志と能力が減退すると明言している。したがって、利子率の変動により貯蓄と投資が均等化するという貸付資金説を否定してはいないのである。...さらに、マルサスは賃金基金説を否定してはいないともいえるから、商品に対する需要の減少は必ずしも労働に対する需要の減少につながらないことになる。したがって、有効需要は産出量を決定しても、雇用量を決定するわけではない。」(pp.70-1) この理論構造から、階級間の所得分配の変化による有効需要の減少は利潤の減少としてのみ表現されることとなり、雇用問題ではなく経済成長率の低下という古典派的な帰結が従うのである。